



福井県

中学校長会の窓

福井県中学校長会
福井県中学校長会広報部
宮田 写植 印刷
福井市春日1丁目7-4
TEL (0776)35-3865

第 143 号

令和4年2月14日発行

会長挨拶



福井県中学校長会

会長 藤井雅之

十月二十四日午前、「あなたが主役の学校づくり」こどもミーティングが福井県生活学習館で開催され、嶺南・嶺北から七校の生徒が集まりました。話題は「校則」「授業」「いじめ」「人間関係」など多岐に及び盛り上がりました。どのグループでも「自分の意見を述べ」「聴き」「問いかけ」「相談し」「うなずきながら」進めていきました。それらは、先生方と一緒に自分たちの学校をより良いものにした、という強い願いの声でした。一人一人が発表する際は、どの生徒も輝いていました。午後の先生たちだけのミーティングで、小学校の先生が言いました。「検温や体調確認で毎朝とても大変です。しかし、一人一人の子供たちと毎朝会話ができます。」福井の先生方は本当に子供を大切にしています。児童・生徒も大きく成長したいと願っています。子供の思いを引き出し受け入れながら、対話を通し、一緒に創っていく学校は素敵だと思います。

私たちは今年度多くの試練に立ち向かいました。まず、新型コロナウイルス感染症拡大への対応です。夏季休業中に県独自の緊急事態宣言が出され、質問会や部活動、体験入学等が中止になりました。学校祭準備にも多大な影響を及ぼしました。修学旅行を卒業式後に移動した学校もあります。臨時休業や大会不参加を余儀なくされた学校もあります。県中学校長会の総会も臨時理事会で代替しました。五月の研究大会奥越大会は延期、十一月の研修会は中止としました。決定前には「学校現場の最高責任者である校長が学校を離れるのはいかがなものか」「県内各地から集まることで感染するリスクは高まるのではない」「現場の先生に示しがつくのか」「研鑽する機会をなくすのはどうなのか」など、理事から様々な意見をいただき方向性を決めました。そんな中、研究大会は十一月に分科会の形式でしたが開催にこぎ着けることができました。発表者や奥越地区や教育研究部の先生方をはじめ、関係の皆様

に厚くお礼申し上げます。次に、働き方改革です。時間外在校等時間八十時間以上の教員をゼロにすることを目指し取り組み年度でした。各市町の校長会のもとより、県中学校長会内の働き方改革推進委員会でもオンラインで会議を重ね、情報を全体に浸透させてきました。特に部活動に関しては、県中体連との意思疎通を図り、県保健体育課や各競技団体等と粘り強く交渉を続けています。目を見張る成果は出てはいますが、来年度以降も関係機関との連携を継続し改善に繋げる方向です。また、四月に県立高校入試の前倒しが公表され、これまでより早い進路指導に努められたことと思います。しかし、新学科に関する説明や初めての導入であるウェブ出願の説明や方法、ウイルス対策等に対する戸惑いもあり、進路対策部を中心に県とも話をしてきました。更なる改善を図っていただくよう、今後も継続してお願いして参ります。

目まぐるしく変わる時代の変化に校長自身が対応しないといけません。たとえば、教育DXはますます進みます。タブレットを活用することで、学習への意欲を引き出し学びを深める研究は必要不可欠です。県中教研では、各地区・学校での活用状況をまとめました。小学校でも活用例が多く報告されており、中学校区内の小学校の現状は把握しておく必要があります。新型コロナウイルス感染症で制限された活動もあった一方、生徒たちが自分たちで何ができるか、どうやって楽しむかを進んで考え行動に移せた活動は、学校祭でも修学旅行でも部活動でも生まれました。私たちは子供が好きで教員になり、正面から向き合い一緒に考え、喜び涙してきました。私たちが若い頃の学校とは様変わりしましたが、子供の幸せを願う気持ちは保護者同様熱いものがあります。今後も現場の先生方の健康管理や働き方に十分配慮しながら、若い先生やリーダーを育て輝く学校を創り出すという、大変であるけれども楽しい学校経営が待っています。学校の輝きは保護者や地域の厚い信頼へと結びつきます。最後に、生徒の学習改善等を図るためのテストを作ってくださった学力診断部。感染者が出た場合の対策も十分準備していただきました。県教育長と語る会に向け、県下の意見をまとめてくださった人事行財政対策部。お陰様で濃い話し合いができました。この校長会の窓を作成していただいた広報部。県全体が繋がる手助けをしてくださいました。そして、県中学校長会の会員の皆様。皆様のお力添えのお陰で、県中学校長会は数々の試練に正面から取り組めました。今後も、生徒が未来を力強く切り拓けるよう皆の力を合わせていきましょう。一年間、本当にありがとうございます。



第70回福井県中学校長会研究大会奥越大会

令和3年
11月18日

分科会報告

■第一分科会

「カリキュラム・マネジメント」の推進

（あるものさがしすべて手持ちのもの
（入ものお金情報を厳密に活かす）

発表者 三方中 百田 忠浩

◎発表要旨

①カリキュラム・マネジメント
推進のための体力づくり（業務改善）

・部活動時間の見直し

コロナ禍の休校後の部活動再開時に、生徒が主体となって練習メニューを工夫し、集中して



ことが可能となった。
②キャリア学習をめぐる総合と学活の単線化

学活と総合の目標を再検討し、重複もしくは似通った活動を確認して双方の学習活動を精選することにした。

・職場体験、職業人と語る会、等
の中止

町内外の先輩や専門家の仕事や活動ぶりに触れる方法に単純化し、学習活動の選択と集中を進めることにより、学活と総合における時間とエネルギーの余裕を生み出せた。

・M I K A T A Research
の進化と充実

若狭町の人、もの、ことにかかわる学習を通して、目的や根拠を明らかにしながら課題を解決し、自己の生き方を考えることができるようにすることを目標に定め、年縞博物館等の多くの関係機関と専門家の方々に協力・指導をいただいている。

◎研究協議

①働き方改革と業務改善の重要性を前提に、いかにカリキュラムマネジメントに取り組んだか
・コロナ禍で実施してきた、生徒主体の教育活動そのものが業務改善・働き方改革につながる。継続していくべきモデルである。

・日課の工夫と夏季休業の短縮等
によって部活動の時間を確保しつつ超過勤務を減らすことができるという実践。夏季の休暇取

得には影響も考えられるが。
・小規模校は地域とのつながりが多く、行事の精選がしにくい面もある。P T A行事等も含めて教育課程に組み込み、勤務扱いとしてはどうか。
②教科と総合的な学習の時間の両輪の相互作用をいかに意識して取り組んだか

・提案のように、総合と学活の重複部分を減らしていくことは必要である。それぞれのねらいを明確にして合理的なカリキュラムマネジメントを実現していかなければならない。
・統合を控える中学校では、大きな課題である。参考にした。

・縦割り活動にすることでコンパクトにまとめ、時間短縮を実現してはどうか。
・従来の担任業務を分担し、無担当が参画することで業務軽減につながることでさらに有効に。

（美浜中 岸本嘉宏）

■第二分科会

よりよく生きようとする
意思や能力を育む
道徳教育の充実

（ポジティブ教育
エナジードの取組を通して）

発表者 上中中 玉井 茂博

◎発表要旨

本校では仲間同士の認め合い、支え合いが可能となるピア・サ

ポート活動に加えて、一人一人のレジリエンス（逆境に負けない力）を強化していくための活動を取り入れたポジティブ教育を実践してきた。加えて「自分が選んだ道を正解にする力を身につける」ことを目指す次世代型キャリア教育教材E N A G E E D（以下エナジード）に二年生が取り組んだ。ポジティブ教育とエナジードの取組を核として、学びを特別の教科道徳をはじめ各教科、領域、学校行事等に生かすことで、学校教育全般を通じて「よりよく生きようとする意思や能力を育む道徳教育の充実」につなげた。

①ポジティブ教育

・一年生では「ピア・サポート活動」と「レジリエンス教育」を柱として取り組み、年間プログラムを通して、良い人間関係を結ぶための気づきを多く与え、学校生活の土台づくりをした。
・三年生では課題解決スキルの授業実践を、嶺南教育事務所研究員と担任のT Tで行った。行動計画を立てる体験を通して相談して課題を明らかにしたり、解決案を立てたりする喜びを、行動への意欲につなげた。

・全校では、人権週間を「ピア・サポート週間」として学級委員会が中心に、各学級の取組を聴き合い、学級ごとの雰囲気の変化や様々な取組を生徒全員で共有することで、さらなるピア・

サポートへの意欲につなげた。
②エナジードの取組



・社会で新たな価値を生み出すための豊かな発想は「周囲が温かく受け入れてくれる」ことが重要である。二年生では、その安心感を生み出すために「ポジティブ・フィードバック(ポジティブな反応)」「アクティブ・リスニング(あいづちを打つ)」「オーバー・コミュニケーション(反応はおおげさに)」の三つのルールを守りながら、グループワークを中心に授業を展開した。学びの活用として、学校祭体育部門の学年種目を企画から実施までの一連のプロセスを体験させた。

③ 特別の教科道徳

・各学年の担任間の連携を深めるために、それぞれ題材を扱う時期を若干ずらして道徳の授業を

行った。先行実施した担任が生徒の反応などを他担任に伝え授業改善につなげることと教材の共有化を図った。

④ 成果と課題

「全体やグループの中で、自分の意見や考えをよく伝えられた」「自分には長所や得意なことがある」という問いに対して、肯定的回答が過去二年と比較して高い。ポジティブ教育そのものの成果もあろうが、各教科での授業や委員会活動等における話し合い活動などにおいて、ポジティブ教育やエナジードの考え方が浸透してきているのではないかと考える。

一方で「将来の夢や目標を持っている」という問いに対する肯定的回答が若干低くなっている。コロナ禍の影響があるのかもしれない。

◎ 研究協議

・評価をどうするか、逆算して考えることが大切。タブレットを使って変容を把握できるように努めるとよいのではないかと。

・新学習指導要領の解説を読み込んだり、研究会等で学んだことを共有したりして、今求められる道徳授業に向けて推進教師を中心に実態に応じて具体的取組を進めるべきである。

・担任の力量差を解消するために、学年道徳やローテーション道徳など担副一緒に学び合う機会が必要である。

・道徳こそ主体的・対話的な授業

を行うよう示していくことが、考え議論する道徳につながっていく。

・教科としての道徳を行うことは必要であるが、心に響く道徳教育を忘れてはならない。

(小浜二中 加福秀樹)

■ 第三分科会

社会的・職業的自立に向けた
キャリア教育と
進路指導の充実

～コロナ禍において、連携を工夫した組織的指導について～

発表者 川西中 齊藤 浩之

◎ 発表要旨

コロナ禍において、これまで行われてきた教育活動が難しい中、キャリア教育や進路指導の充実に努めてきた。そのために校内指導体制の工夫と郷土ボランティア活動推進・夢や希望の実現につながるキャリア教育・組織的・計画的な進路指導の三つの重点項目について研究の実践を報告する。

① 校内指導体制の工夫

○ 複数担任制

長期休業明けで生活習慣も不安定であるため、生徒一人一人に丁寧な支援を行う目的で実施した。朝の会、給食、帰りの会や学活など学級経営を二人で担うことにした。教員においても実践的な学級指導力の

向上につながった。

○ 輪番制による学年道徳

年間指導計画を基に一人の教員が同じ題材を二学級で実施した。授業を担当しない教員は授業観察を行い、事後に意見交換することで授業改善が活性化した。

○ 学校と保護者との連携

コロナ休業中にはホームページ上に学習プログラムを掲載し、随時更新した。また家庭には緊急メールを使い、速やかに学校の情報を提供した。

② 郷土ボランティア推進と活動の成果発信

○ 川西桜祭り

地区の青年グループと有志生徒での企画・運営で実施した。中心メンバーの一人はボランティア活動を生かして進学につなげた。

○ 鶴コウノトリの郷プロジェクト

地域の団体と連携して自然保護の活動に参画したり、様々な教科の中で学びを深めたりする活動を実施した。さらにその学びを地域に発信する活動につなげた。

○ 地域活性化企画会議

地域の活性化に取り組み地域の団体の会議に参加し、中学生として協力できることを提案し、ポスターやぬいぐるみ制作など積極的に活動することができた。

③ 夢や希望の実現につながる

キャリア教育

○ 地域の担い手プログラム

職場体験学習ができなかったため、地域の様々な職場で働く多様な方との対話を通して「働くこと」や「社会に参画していくための力」について学ぶことでキャリアプランニング能力の育成を図った。

○ 立志式での取組

保護者や下級生に対して、生徒の将来の目標とその過程をプレゼンし、コミュニケーション能力を高めた。

④ 組織的・計画的な進路指導

○ 上級学校調べ

全校生徒が閲覧できるように進路コーナーを常設し、生徒の進路設計に役立てた。

◎ 研究協議

「校内指導体制のあり方・体験活動を含めたキャリア教育の在り方」について三つのグループに分かれて各校の取組を紹介しながら協議を行った。

・三年生の進路だけでなく、学校全体のキャリア教育を担える教員を育成していく。また今後多様な職業が生まれてくることを考えると、管理職として教員が学ぶ場を設けることも必要である。

・反社会的な問題に対して、未然に防ぐために校内指導体制を各学校として整えていくことは大切である。複数担任制、相談室の体制充実などチーム学校としてのきめ細かな指導が必要で

ある。その中、学年副主任を学年全体の副担任に据えているという紹介があった。

・キャリア教育にとつてタイムリーで生徒が興味を持つ外部講師は重要である。芦原中では旅館焼失から再建を果たした社長や新幹線開通にかかる講師、南越中では卒業生でもあり、金メダリストの見延氏を講師としたことで意欲的な学びができたとの報告があった。

(灯明寺中 塩谷圭司)



■第四分科会

他者を敬愛し
他者と協働しながら
自己実現を図るための
自己指導能力を
育成する生徒指導の充実

〈生徒理解を深め、主体的に行動できる生徒の育成〉

発表者 三国中 黒川智幸

◎発表要旨

①共感的な人間関係の育成

○アセスを使った生徒理解

・六月と十一月の年二回行い、クラス全体の実態と生徒個人の実態を把握して支援を行った。

○ピア・サポートを活用したい
はじめを防ぐ学級づくり

・相手の気持ちを読み取ることや自分の思いを上手に伝える方法を学習し、話し合い活動の活性化につながった。

○学級活動や部活動の取組

・生徒の悩みについての話し合い活動やピア・サポート活動、チームとしてまとまるために必要なことや、先輩・後輩とのよい関わり方を考えさせた。

○SSC、SSWとの連携

・面談や医療機関へのSSWの同行など、連携した取組を積み重ねた結果、不登校生徒の登校日数が改善してきた。

②自己存在感を与える

○通常授業での実践

・生徒の発言を大切にし、どの場

面でも、どの生徒を生かせるかを考えて授業を行うよう考えさせた。

・他教科の授業に参観に行くよう全教員に働きかけた。

○ポランティア活動や地域と連携した取組

・クリーン作戦
毎年、三国花火後の清掃活動を行っている。(昨年と今年は海水浴シーズン終了時に実施)
・コミュニティセンターと連携した取組

・汐見公園で芝桜の苗植えに、部活動単位で参加した。

・地域イベントへの参加
一昨年まで、三国祭りやコミュニティセンター主催のハロウィンイベント等に参加した。

③自己決定の場を与える

○学校行事の取組

・体育祭・文化祭
体育祭は、密を防ぐため、競技や応援合戦を工夫し、作り物を看板から旗に変更した。衣装も、簡単に着脱できるものにした。文化祭は、密になるステージ企画を、全学年が校舎全体に模擬店を出店する企画に変更した。

・修学旅行・校外学習
修学旅行は、感染防止を考えた交流会を実施した。校外学習は、生徒主体で目的や訪問先などを考え実施した。

○生徒会執行部による取組

・各学年に目安箱を設置し、学校生活をよりよくするための意見

やアイデアを募集した。

④研究の成果と課題

・アセスの導入により生徒理解が進み、生徒一人一人の状況に応じた支援を行い、学級不適応生徒や不登校生徒の改善につながった。

・自己決定の場や自己存在感を与える場面を増やしたことで、生徒の自主的な活動が増え、意識や責任感が向上した。

・家庭・地域と連携してふるさと文化や伝統に触れ、協働して活動することによって自己有用感を高められた。

・自己肯定感を高める場の設定に、校長がリーダーシップを発揮することが重要である。

◎研究協議

・学校祭は、外部の大きい施設で保護者を入れて実施したり、ウェブ配信で保護者に公開したりした。ただ、準備に時間がかつた。超過勤務が増えた。

・問題の対応は、初動のまずさによりこじれることがあるので、働き方改革というものの、最初に丁寧な時間をかけて対応するほうが、結果的に時間がかからない。

・特別活動のあり方だが、行事のための準備に終わっているのが、人間関係作りには効果はあるが、深い学びや議論には結びついていない。

(春江中 市村直哉)



校長三昧



多くの出会いに感謝

国見中学校長 渡邊 俊範



新任として赴任した春江中学校で、千名余りの生徒、教職員を目の前にして

緊張が始まった教員生活。その後、六校の中学校で勤務し、七、八千人の生徒や先生方との出会い。さらに多くの保護者や地域の方々との出会い。授業や部活動・いろいろな行事や生徒指導に奔走する日々を、多くの出会いの中で助けてもらいながら楽しませてもらった三十八年間で、東北北陸研究大会や部活動では、多くの県外の生徒や先生方とも楽しく活動させてもらいました。

今、教員生活を終えようとしている国見中学校では、これまでの学校では経験できなかった活動を保護者や地域に支えていただきながら楽しませてもらっています。防災への取組の一つとして修学旅行で訪問した仙台では、被災からの復興に懸命な人々との出会い。首相官邸に向き学校安全の表彰を受ける経験までさせてもらいました。

これまでに出会い、共に活動し、

多くのお力添えをいただいた皆さんに感謝です。ありがとうございます。

感謝の一言

美山中学校長 藤井雅之



新採用の赴任地は武生第五中学校でした。三月末に挨拶に向かい、安養寺ト

ネルを抜けた時の雪の多さとその眩しさは、今でも目に焼き付いて離れません。当時の教頭先生は私に、先生のいろはを丁寧には、具体的に教えてくださる師匠でした。家に泊め、一緒に甲子園野球観戦にも連れて行ってくれました。素直な生徒たちに囲まれ、今思えば大変熱い指導で、教科指導・部活動指導に成果を挙げることができました。私の教育者としての原点です。

あれから大規模校も、荒れた学校も経験させていただき、多くが中学校でした。疾風怒濤の時期を生きる一人一人の中学生と、そしてその保護者と心の触れあいを重ねてきたつもりです。しかし、周りには助けにくさる先生方が絶えずおられました。私は、いつも生かされていたのだ、と痛感しています。一方、私は管理職としてどれだけ先生方を育て助けられたのでしょうか。少しでも役に立てたのなら幸いです。これまでお世話になった方々に、深い感謝の思いをお伝えしたいと思います。

校区と共に

灯明寺中学校長 塩谷圭司



教員生活のスタートは、本校校区の河合小学校でした。その後いくつかの

小・中学校に勤務しました。そのひとつが本校でした。そして十一年ぶりに再び校長として本校に赴任できると分かった時、この校区への愛着が高まったことをおぼえています。当時河合小学校で教えた子供たちは現在保護者としてPTAの活動などに協力してくれています。さらに部活動の大会等には、孫の応援に当時の保護者の方々にお目にかかることもあり、この校区で十三年間、教員生活の約三分の一を過ごせたこと、また多くの出会いがあったことに感謝しています。

校長になつてからは「地域と共にある学校」を目指し、地域に貢献する活動「絆プロジェクト」を実施しました。本校校長であった公民館長に依頼して、各自治会の方々と相談しながらできたことも、生徒たちの活動を活性化することにつながりました。花壇づくりの手伝いをしたり、公園や集会場などの清掃をしたりと地域の方と共に様々な活動ができました。退職後は自分の住む地域のために貢献していきたいと考えています。

教員という仕事

至民中学校長 小林真由美



「おまえは総理大臣にはなれないが、総理大臣を育てることができるぞ。先生になれ」私が教員を志す契機になった恩師の一言。総理大臣を、というわけではないのですが、子供の可能性を無限に引き出せる気がしたので思い出します。今になると、そんなおごりを若かったと懐かしむばかり。引き出すことなど何一つできなかったけれど、私は子供たちから多くのことを学びました。中学時代は、たった三年間ですが、人生の大きなステップとなる貴重な時間です。ともにこの三年間を過ごした今の至民の三年生はコロナ禍の中で、本当に大きな成長を遂げました。辛抱強く愛情をもって育ててくれた先生方と、強くまっすぐに育った生徒たちに感謝するとともに、これが教員の本当の喜びだと感じています。

今日まで辛いこともたくさんあって、「生まれ変わっても先生になりません」とすぐには言えないけれど、やっぱり教員は素敵な仕事でした。それはきつと子供たちの輝く人生の一部を共に歩くことができたからでしょう。



「文武両道」を目指して

川西中学校長 齊藤浩之



「役職に就くことが目的ではなく、その役職で何を発行するかが大切である。良かれと思ったことはスピード感を持って実行して欲しい。来学期、次年度からではなく、今の前にいる生徒たちのために勇気を振り絞って頑張ってもらいたい。」これは、年二回ある生徒会役員認証式で必ず述べる言葉である。

三年前、縁あってこの福井市川西中学校長を拝命した。生徒に投げかけている言葉を自分の旨とし、教員生活の集大成として、教職員に先頭に立つて学校改革に邁進してきた。

「文武両道」を旗印に、教職員には常に「率先垂範」を求めた。生徒に要求することはまずは自分から。その後ろ姿を見て生徒たちも「師弟同行」で地道な努力を積み重ねられるようになり、中学生としての力量、教職員としての力量を少しずつ確実に高めることで、各々に生きる力が身に付いてきた。校長として、やるべき事は全てやり切った。思い残すことは何もない。この場を借りて、改めて、生徒たちとその保護者、地域住民、そして教職員に心からの感謝の気持ちを述べたい。「三年間、本当になりたいがとう。」



その時々を懸命に

永平寺中学校長 前川 秀幸



教員生活を振り返ってみると、二十代、四十代は、担任、教科指導、部活動と指導力をつけたいという思いで時間をかえりみず、懸命に取り組んでいたことが思い出されま

す。四十代後半からは、主任、管理職として、学年、学校全体、町内全体を意識しながら懸命に職務に取り組んできました。また、我が子の誕生とともに、子供の後ろにいる親の気持ちを考えての指導方法や接し方等、今思えば、周りが見えるようになり、徐々に関わる人々の思いや考えを考慮しながらの対応に変わっていったような気がします。

改めて児童生徒たち、先生方、保護者や地域の方々等、多くの出会いがあつて、今日の自分があることに感謝です。今後、新たな出会いと共に新たな生活が始まりますが、どんな挑戦をしてみようかと楽しみます。その時々を懸命に生きたいと思います。

私の好きなお話

陽明中学校長 齊藤 孝実



管理職になってから出会ったお話で、大変好きになったお話があります。そ

れは、家を新築すると七人の神様が急いでやってきて担当する部屋を決めるといってお話です。最初にやってきた神様は、一番お金の

かかっている客間を担当し、最後にやってきた神様は、一番狭いトイレを担当するというのです。最後になった神様は、家を豊かにする金銀財宝を持ってきたので遅れたそうです。だからトイレをきれいにすると豊かになるそうです。私は、このお話を信じて管理職になってからも、清掃の時間は生徒に交じって雑巾がけを続けることにしました。時間があればトイレ掃除をしました。するといい事がたくさん起こりました。困った問題が

毎日小さな挑戦

上庄中学校長 安下 和男



令和二年四月、私自身が学んだ母校の校長として赴任した。時あたかも

全国一斉臨時休業の最中。感慨にふける間もなく、学校が再開された時に、いったいどんな言葉で生徒たちを迎えたらよいものか、途方に暮れる日々が続いた。そこでふと思ひ出したのが、奥越高原青

少年自然の家の所長時代、私の投稿にて採用された(と思つている)「福井県職員 クレド」(※「クレド」とはラテン語で「信条」、「志」、「約束」の意味)その②「挑戦」って毎日するもの。(自分の枠に捉われず、

小さな挑戦を毎日続ける。)のフレーズだった。新型コロナウイルスとの戦いは、いつ終わるのか見当もつかない。何かにつけて制限がある学校生活だが、できない事を嘆くのではなく、何ができるかを考えて、毎日、小さな挑戦を続けてほしい。機会あることにそのことを生徒に伝えてきた。そして、同時に自分自身の志となつた。さて、明日は何に挑戦しようか。誰かの助けになることができれば最高のだけども。

教員生活を振り返って

勝山北部中学校長 小林 泰浩



早いもので、三十八年の教員生活のゴールが見えてきました。教員になり

たての頃は、まずなんにでもがむしゃらに取り組んできました。そして、自分の専門は「これだ」というものを探していたように思います。

二十代、三十代前半は大学院・日本人学校で県外の人に出会うことができ、これまでの自分が大きく変わり、まさに「井の中の蛙大海を知らず」状態でした。三十代後半から四十代は校内LANの設計や校務の情報化・白山登山・理科研

究大会・環境教育・ESDと、時代の風にとつた教員人生でした。五十代でいよいよ管理職となり、最後は後進へと思つた時のコロナ禍でした。まだまだやりたいこともありましたが、危機管理に奔走したように思います。

今思うと、これまで、たくさんの方々の先生方はじめ生徒・保護者や地域の方々にお世話になつていたとつくづく思います。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。これからの皆さんのますますの発展をお祈りします。ありがとうございます。

新採用の思い出

中央中学校長 澤 和広



私の教員人生は、美浜中学校丹生分校から始まった。県庁での辞令交付後、

美浜町教育委員会へ挨拶に伺つた。教育長から高話をお聞きした後、自分が分校への勤務だということわかつた。分校主任の先生と一緒に学校へと向かつた。この日は、快晴。風光明媚な水晶浜は圧巻の景色だった。学校は小中併設校で、数学、保健体育、小学六年理科を担当することになった。小規模校であるため、教頭先生と養護教諭の先生が事務の仕事を担当されてきた。日頃からお二人の先生が旅費や給与の話など、相談しながら取り組んでいらつしやつたため話の中身が自然と耳に入り、知らず知らずのうちに事務に関する知識が増えていった。同時に、在職して

いた三年間に、教務や生徒指導などいろいろな仕事を経験させていだき、学校全体のことが分かるようになった。

この時の貴重な経験が、それから後の私の教員人生において大きな財産となつていると感じている。十年ほど前、分校は閉校となつてしまつたが、新採用の三年間に感謝しながら、美浜での日々を懐かしく思う。

あこがれの指導者像

鯖江中学校長 大久保文義



「寛厳よろしきを得る」私は今年度をもって退職することとなりま

す。教職に就き、まずは小学校で担任として、中学校では、担任・部活動顧問として、そして若い時代にお世話になつた鯖江中学校校長として、生徒の成長する姿や地域や保護者の方と共に歩むなど様々な経験をさせていただきました。そして同時に、それぞれの立場で、楽しむだけでなく、もがき苦しんだりしてきたように思います。

そういつた中、今の自分があるのは、若い時に諸先輩方の後ろ姿や同僚との語り合いがあつたからだと思つていきます。

中堅となつたある日、一つの言葉に出会いました。それが冒頭に

ある言葉です。私なりに解釈し、心掛け、取り組む努力をしました。しかし、私には理想に届くのにまだまだ力不足であると実感することが多かつたよ

うに思います。

そうしている間に退職となり、志半ばとなりましたが、これからもあこがれの指導者像を心掛け、物事に励める地域人になりたいと思っています。

この道をふり返って

宮崎中学校長 太田 秀一



あつという間の三十八年間で、後先考えずにがむしゃらに指導してきた若かりし頃。微力ながら中堅として学校運営を支えた日々。学校行事や部活動で、生徒と共に汗し涙しながら、幾つもの歓喜に浸った感動は今でも鮮明に心に残っています。そして、その時々に分だけだけのエピソードや学びがありました。

その一つに、私は退勤時の職員への声かけ(挨拶)に必ず「ありがとうございます。これは臨時で勤めていただいたご年配の方の姿を真似たものです。謙虚さと感謝の心を、毎日言葉で表すことの大切さを改めて教えていただいたように感じました。ありがとうございます。」や「おかげさまで」が増えたような、お辞儀が少しずつ深くなってきたような、気がしています。

今まで出会った皆様に支えられ育てていただき、人となりの大切さも学びました。そのお陰で、これまで挫けず迷わず教職の道を歩むことができたことに心から感謝いたします。

ありがとうございました。

感謝

越前中学校長 佐々木昌広



昭和五十九年四月、大学を出たばかりで何も分らず不安を抱えながら全校生徒千五百人の明道中学校に赴任した時の緊張感を思い出します。一学年十二クラス、教職員五十余人、先輩方からいろんなことを教えていただき、様々なピンチも救っていただきました。また、中学校や高校の体育でしかやったことのない剣道の部活動顧問となり、生徒と共に級審査や段審査を受けながら先生方、生徒達から多くを学びました。大規模校から中・小規模校、中学校、小学校、町教委派遣社会教育主事、四校兼務の新採用指導教員と様々な職種や職務を経験させていただいたり、地域の少年剣道の指導を頼まれたりして、少しはいろんな立場で物事を考えられるようになりました。これまでに多くの生徒や保護者、先生方、地域の方々とお会いしたことはこれから始まる第二の人生の大きな支えとなってくれるものと思います。私のような者が三十八年間の教員生活を全うできることを皆様に感謝します。



出会いと仲間へ感謝!

武生第二中学校長 山本晃市



昭和五十九年四月に、全校生徒数が千人を優に超える、福井市成和中学校から始まった教員生活三十八年間で、着任した三日後の入学式で、一年生の担任として生徒・保護者合わせて九百人以上の前で、大粒の汗を流しながら話をしたことを鮮明に覚えています。

その後、越前市内の中学校で二十一年、管理職として六年、行政職として七年勤務しました。数年連続で進路指導に尽力した三年生担任。部員と共に汗を流し数々の優勝を獲得した部活動。全国大会等での発表や研究会の責任者として携わった数学教育等。これらの良き思い出の一方で、生徒の尊い命が失われた辛く痛ましい事件は今も脳裏から離れません。

回想と感謝

南条中学校長 齋藤 為之



平成元年、新採用で母校の今庄小学校に着任しました。文部省体力づくり研究推進校指定一年目で、三か年の研究推進を経て、六年生担任として約五百人の参観者の前で公開授業を行った記憶が鮮やかに蘇ります。これが教員としてのスタートであり原点であったと振り返ります。

中堅教員中央研修、海外派遣研修、道徳教育、キャリア教育中央研修等の研修機会をいただきました。派遣社会教育主事、地教委連指導主事、教育庁義務教育課主任の九年の行政職経験を積ませていただきました。嶺南での教頭職を含め小中学校の教頭職を、また小中学校の校長職を拝任いたしました。学級担任として関わり合った約三百人の子供たち、多くの同僚の先生方、様々な機会に出会った先生方、これまでの人生において関わりのある全ての方に支え励ましていただいたからこそ、私が今ここにいますと確信します。これを目にする全ての方にこの場を借りまして、心から感謝とお礼を申し上げます。

始まり

松陵中学校長 濱野 隆



教員のスタートは、全国的に「校内暴力」が騒がれた頃の滋賀県の中学校。校舎の窓ガラスは毎日割られ、天井は穴だらけ。上階の窓からいろいろな物が降ったり、トイレからシンナーのにおいがしたり。刺激的で体力勝負の毎日。子供たちと充実した大変濃い時間を過ごしました。

その後、福井県へ。初任地は敦賀市立西浦中学校。学年一人の素直な中一生徒の担任。一変した平和で穏やかな毎日。

さて、前任校のあの子がこの生徒だとしたら、どんなふうに行動するのかを考えると、環境が与える影響を思わずにはいられません。

子供たちはその集団の中で、自分を素直に出せないときがあります。その言動だけを見て指導すると、子供との心の距離が広がるばかり。子供の姿をしつかり見ないと...と原点に立ち返ったりリストアップでした。

長く教員をしてきましたが、この一年も日々子供たちに学ぶことばかり。四月より子供たちから離れますが、違う学びを求めて生活していきます。



教員生活を振り返って

粟野中学校長 高谷 敦志



母校である粟野中学校で教員生活をスタートして以来、今年

で三十八年目となりました。新採用当時は、本校は校舎改築第一期工事の真っ只中であり、自分が学んだ教室で自分が授業するという貴重な経験は一年で終了し、二年目からはできたばかりの新校舎での教員生活スタートでした。中学校は三十五年間、小学校は四年間だけの勤務となりましたが、常に良き先輩や同僚に恵まれ、苦楽を共にしながら教員としての喜びや充実感を存分に味わうことができました。特に松陵中学校での学年主任としての経験は、自分自身の教育観を確立する礎となり、「教員の子供たちのために尽力したい」という決意を新たにしました。貴重な経験でした。

最後は常に感染対策を念頭に置く二年間でしたが、生徒には「ピンチはチャンスであり、新しい変化を自分の中に生み出す一年にしよう」と伝えてきました。退職を迎えた今、この言葉を自分自身に向けて、次への決意を新たにしているところです。



美浜中学校とともに

美浜中学校校長 岸本 嘉宏



美浜中学校が誕生したのは昭和五十年四月。私は中学二年生として在籍して

いました。それまで町内には、私の中一時代を過ごした中学校を含め四つの中学校がありました。統合されて美浜中学校となったのです。すべてが新しく、最新の設備を備えた校舎でした。

時は流れ、私が美浜中に赴任したのは平成十八年でした。校舎は築三十年を越え、耐震の関係もあり、建て替えが決まっています。新校舎の建設と引越を経験しました。物品を整理していると、美浜中学校当時の教材・教員が見つかり、大変懐かしかったです。

平成二十一年八月、建設工事が完了し、新校舎での学校生活が始まりました。三十年前と同じように、身の回りがすべて最新の設備・備品という環境を経験することは、滅多にないことだと思えます。美浜中の誕生と生まれ変わりの両方を経験できたというのは、なんとも不思議な気分です。そんな美浜中学校で教員生活の終了を迎えようとしています。

今後は、今までは違う立場で美浜中学校を支える美浜町民でありたいと思います。



和顔愛語・美点凝視

三方中学校長 百田 忠浩



その年々に任せられた仕事を、人一倍やっただとは言わないが、自分なりに

精一杯やってきて、気がついたら定年を迎えていた。

副担任、学級担任、進路指導、学年主任、生徒指導、教務主任、指導主事、主任、教頭、参事、校長とやらせてもらい、「いろいろ大変だったが、あれはあれで面白かった」と今は言える。中でも三年担任で進路指導主事の頃が一番夢と高揚感があった。

上司には可愛がってもらったし同僚にも恵まれた。助けられた部下も多いが、フオロした部下もいる。それでも「小人怒りやすし」の実体験に懲りて、「良いところ」目を向けて、おだやかな表情と柔らかな言葉遣いに努めてきた。

お陰様で、前任の校長から受け継いだ「さすが三方中学校」のタスキを、さらに良い状態にして次の校長に渡せそうだと安堵している。年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず。やりつくしたような、やり残したような。もう一回人生をやり直すとしたら、やっぱり教員が良い。



流れの中で...

小浜中学校長 山名 聡



初任校で、先輩の先生が購入されたワープロを見た時の衝撃は忘れられません。一行しか表示されないものでしたが、(技術面・経済面から)自分もこんな機器を使えるようになるのかなと考えたことを昨日のことのように思い出します。今では、毎日のようにパソコンにとらめっこする自分に驚きを感じます。(時代の流れかな...)

部活動指導に魅力を感じて教員を志望しました。中学校勤務になり、土・日も関係なく部活動指導に取り組んだことを懐かしく思い出します。今では、部活動指導面から業務改善に取り組んでいる自分を不思議に思います。(時代の流れかな...)

時代という大きな流れの中で、悩みながらも流され過ぎず、三十八年間、なんとか教職人生を歩んでこられました。この間、出逢えた多くの方々にご指導いただき、支えていただいたおかげです。

時代の流れの中でステキな出逢いに巡り会えるよう、新たな人生を歩んでいこうと思えます。ありがとうございました。



恩送り

名田庄中学校長 中島 正一



「やつと約束が果たせました。」数年前に、かつての同僚からもらった年賀

状の一言です。仕事で遅くなると、一人暮らしをしている同僚を時々自宅の夕食に誘いました。夕食のおかずを分けて食べるだけです。農家なのでご飯のおかわりは自由です。「いつかあなたの学校で嶺南の若い先生がお世話になる時があったらその人にお返しして。」そんな私の家族の思いをずっと覚えてくれていました。

「やつと、約束が果たせました。嶺南出身の先生を初任から三年間お世話することができました。今年地元へ戻りました。」

中学校英語科の教員として三十二年、何十人ものALTとともに働きました。よく自宅の夕食に誘いました。お互いの文化を楽しみました。一緒に観光やプロ野球観戦にも出かけました。

「いつかあなたの国で外国の若者があなたにお世話になるときがあったらその人にお返しして。」そんな思いを伝え合いました。お世話になったみなさんに直接お返しすることはできませんが、これからは、地域人として、地球人としてできることを続けていきたいと思えます。